ベララベラ島戦記

米軍六千人、上陸

昭和十八年七月初め、**制海権**は既にアメリカ軍の手中にある状況下、我が部隊は**駆逐艦**で南洋諸島の一つであるブーゲンビル島[1]ブインに進出した。

同じ年の八月、「[3]ベララベラ島ビロアに米軍六千人上陸す」との知らせを受け、同島に米軍飛行場を建設されることを恐れた我々の上層部は、これを辞めさせるため、急きょ、総勢五百八十人の兵を島に上陸させた。私も十三ミリ対空**機銃**の射手として、島に上陸したものの、六千人対六百人と大きな戦力の違いでは、到底かなわない。圧倒的な力の差に悪戦苦闘を重ねた。

本部からの補給も全くなく、食糧や弾薬も底を尽き、とうとう**玉砕**命令が発せられ、隊員たちは全員戦死を覚悟した。

[4]中部ソロモン群島の**撤退**作戦で、将兵一万人余りが無事、ブーゲンビル島に**撤退**したことにより、**玉砕**命令が発せられていた私たちベララベラ島兵士も、十月七日、どうにかブイン海岸に引き揚げることができた。また、我々の働きに対し、長官よりねぎらいの言葉があり、ベララベラ隊は解散し、それぞれ元の隊に帰ることになった。

[5]チイセル島

昭和十八年十月中旬、高射機銃小隊、第一中隊第三小隊、速射砲隊がモノ島に進

※制海権…艦隊などの戦力が有利な状況を保っている状態。
※駆逐艦…魚雷などを備えている小型の高速軍艦。
※機銃…機関銃のこと。引き金を引き続けると、連続して多数の弾丸を打つことができる銃。
※玉砕…死を覚悟して力の限り敵と戦い、潔く死ぬこと。
※撤退…陣地などを取り去って退去すること。

出したが、十月三十日、**玉砕**。このころ、ブイン山対空砲台の十三ミリ対空機銃隊は陣地に直撃した弾で七人全員が戦死した。

さらに、同年十月末、チイセル島中部に米軍上陸との知らせを受け、我々の部隊から予備少尉を隊長として、一個小隊がチイセル島バンバタに敵の様子を探るため出動したが、これも全滅した。

ベララベラ島より**撤退**した私たち隊員の中で「もしかすると日本に帰れるかも」という、淡い夢のような話がささやかれていたが、それとは逆に、私たちにはチイセル島に進出せよとの新たな命令が下された。

チイセル島に上陸以来、敵**駆逐艦**、**魚雷艇**などの砲撃を受けたがほとんど損害はなく、昭和十九年を迎えた。

昭和十九年三月、私たちの小隊は敵機の猛爆撃を受け、小隊長以下八人は一片の肉片を残すだけの壮烈な戦死を遂げた。同時に小隊食糧も全部爆風で飛ばされ、小隊の食糧はゼロとなる。こうした中、「農園を開墾し、自給自足できるようにせよ」と

の命令が発せられた。

しかし、農園開墾作業のために島の警備が手薄となることを恐れた司令官は、兵隊を陣地に配置したまま開墾作業を行わせたことによって、その作業に従事する兵は極めて少なくなってしまった。おかげで、我が呉第七特別陸戦隊の食糧自給態勢は大きく立ち遅れ、ついには栄養失調の隊員が続出し、加えて悪性マラリアで戦病死する隊員が日を追うごとに増えていった。

しばらく経って、ようやく本隊の所在地より二キロほど離れた原住民の焼畑農園付近が新たに開墾され、下士官一人に兵隊四人の計五人がイモ苗の作付けと、農園の管理のために**機銃**を持って、開墾された農園に行くことになった。

※玉砕…9ページの注を参照。
※撤退…9ページの注を参照。
※駆逐艦…9ページの注を参照。
※魚雷艇…水の中を進んで船に命中させる爆弾を備えた小型の高速艇。
※機銃…9ページの注を参照。

銃撃戦

いつものように昼食を終え、坂本上等水兵は小銃を持って海岸に小魚捕りに行き、残り四人が食べ物の話に夢中になっていると、突然数発の銃声を聞いた瞬間、尾崎兵曹がその場に声も出さずにうつ伏せに倒れた。私もとっさに小屋から飛び出て、地に伏せたものの、右手上部に熱いものを感じたが、弾が当たったことには全く気付かなかった。私は、

「敵襲だ！　渡辺、木城、坂本」

と、大声で仲間の名前を呼んだ。敵弾はプシュプシュと絶え間なく飛んでくる。木城上等水兵が海岸方面に逃げ、渡辺上等水兵は陣地に掘った穴から私を呼んでいる。ほふく前進で声のする方に向かおうとするが前に進めない。右手を見ると、手がねじれたようになり、血がタラリと流れ、ザクロのように大きく傷口が開いていた。重傷だったが、不思議にも痛さは感じなかった。渡辺も足をやられたのか、ズボンから血がにじみ出ていた。そんな状況にあっても弾丸は近くにプシュプシュと飛んでくる。

敵の声はするが、それ以上は近づいてこない。大きな声で、
「坂本、渡辺、木城」
と、繰り返し呼び続けた。足をやられた渡辺が小銃に弾を込め、一方、私は敵の声がする方向に左手で応戦した。
突然、敵のいる方角で、うなるような大きな声がしたと同時に銃声が止まった。敵が逃げたのだ。
穴の中で渡辺と二人で**ゲートル**を裂いて止血していると、渡辺が、
「だめです」
と言った途端、うなだれてしまった。必死に、
「オーイ渡辺、渡辺」
と肩をたたくと、一瞬、目を開けるものの、またすぐにうなだれてしまい、いくら呼んでも返事がない。そのとき、私は、戦死したと直感した。
静かだった。付近を見渡すと尾崎兵曹がうつ伏せに倒れていた。渡辺は穴の中でも

たれている。木城と坂本が見当たらない。私一人になってしまった。再び敵襲、爆撃があるのではと考えると、いいようのない恐怖が走った。しかし、気を取り直し、本部に報告に行くことを決心し、小銃一丁を左手に抱え、ジャングルの中をさ迷い突き進み本部へと向かった。

救出

途中で、いち早く逃げていた坂本に追いついた。彼は、昭和十七年の若い**志願兵**だ。怒ることもできなかった。

そして、川幅五十メートルぐらいのワニオリ川に到達した。坂本が泳いで渡り、小隊本部に報告してくれた。おかげで、本部から迎えの者が来た。

翌朝、一個小隊が現地に派遣され、心配していた渡辺、木城の二人を担架に乗せて

※ゲートル…ズボンの裾を押さえて、足首から膝まで覆うもの。
※志願兵…自分から進んで軍隊に入った兵。

帰ってきたのである。二人とも無事だったのだ。三人で互いの無事を喜びあった。

聞けば、木城は足を負傷して気を失っていたが、南国特有の激しい雨にさらされ、気が付いたという。これが本当に**九死に一生を得る**ということなのだろう。

また、このころになると、病室からも栄養失調のため、毎日のように戦病死する兵隊が出ていた。

十月のある夜、ブーゲンビル島ブインに連絡便が出航することになり、私たち三人と数人の栄養失調症の兵士たちが乗船し、ブインの残留部隊へ後送されることになった。

ブインは農園の開墾が進み、少量ではあるが、芋が収穫されるようになっていた。

ブインの病室に入室以来、朝食と夕食にさつま芋が食べられるようになり、また、時折、同年兵の池上水兵長が、皆には内緒で、さつま芋を差し入れてくれて、戦友の

※九死に一生を得る…ほとんど命を失うほどの危難の中から、幸運にも助かること。

有り難さをしみじみと感じた。

毎日寝てばかりでは衰弱して死んでしまうと考え、私は無理をしても起き上がり、杖を頼りに一歩一歩と歩く訓練を始めた。

毎日毎日こんなことを繰り返しながら、少し歩けるようになると、ジャングルの中を飯盒を下げて「かたつむり」や「木の芽」を探し回るようになった。とにかく食べられるものは何でも食べることだ。

決戦の準備

このころ、ブーゲンビル島タロキナ方面では、日本陸軍最強といわれていた熊本の第六師団が悪戦苦闘し、じわじわとブイン方面に追い詰められ、昭和二十年五月、ブーゲンビル島決戦態勢が決定した。呉第七特別陸戦隊もチイセル島の全部隊も、ジャングル内に塹壕を掘って決戦に備えた。

そのような中で、怪我により右手が全然曲がらず小銃を持てない私を始め、半病人

や身体の不自由な兵隊たちは、地雷、あるいは**手榴弾**を二つ束ね、敵戦車に対し体当たり攻撃する訓練を毎日行っていた。

このように緊迫した状況下でも、**最古参**の私たちのように負傷して行動が不自由な者や、農園作業にも出られない病弱な兵隊たちに対しての嫌がらせは目に余るものがあった。

「おい！　貴様ら、さっさと訓練しろ」

「何だ。そのへっぴり腰」

と、銃で思い切り腰を殴られた。

しかし、**最古参**の下士官であるため、耐えるしかないのだ。

※飯盒…飯を炊くアルミニウム製の容器。
※塹壕…野戦で、敵弾をさけ、身を隠すために掘る溝。
※手榴弾…主に手で投げる小さな爆弾。
※最古参…一番古くからその仕事についていること。

空からまかれたビラ

昭和二十年八月十六日、上空をいつものように敵機が旋回していたが、この日は何かが違った。ジャングルの木すれすれに何度となく旋回している。恐る恐る航空機を見ると翼に「日本降伏」と書いてある。そして、ビラをまきながら敵機は去っていった。ビラを見るとその状況が細かく書いてある。中隊長も跳んできた。ビラを見て

「敵のわなだから、敵機が来ても塹壕から出ぬように」

と注意された。

翌日も朝から、日本降伏と書いた敵機が陣地に飛んできて、上空を旋回しながら昨日と同じように「ビラ」をまいた。敵機が去った後、陣地の兵隊もぞろぞろと出てきて、農園に落ちているビラを読んでいる。その日の午後、中隊長が隊員全員を集合させ、日本軍が降伏したことを報告、詔書を読み上げた。すすり泣きながら聞いている者、泣くのをじっと我慢しながら目を真っ赤にしている者など、その心境は複雑でもあり、様々であった。

祖国日本へ

昭和二十一年厳寒の二月、私たちは祖国日本に帰還した。呉第七特別陸戦隊一千四百人のうち、生き残った者はわずか三百人にも満たなかった。

その後、部隊は解散、元気な者は早々故郷に帰り、渡辺兵曹ほか私たちのような負傷者や病人は、一時病院に入院となった。

病院から退院した私は、故郷に帰ったが、手が不自由だったために、その後の生活面においていろいろと苦労した。

しかし、ソロモン群島の戦場で体験した苦労を思えば、大したことではなかった。大正に生まれ、昭和に戦い、今、平成に生きる喜びを誰に伝えたらよいのか。折に

※降伏…敵に対して敗れたことを自ら認め、戦闘行為をやめて敵に従うこと。
※塹壕…19ページの注を参照。
※詔書…天皇の命令を伝える公文書。

触れ、思い出す亡き戦友の**冥福**を祈るのみである。同じ地球上に住み、同じ空気を吸う人間が知恵を出しあえば、戦争など起きないと思う。いかなる理由があっても戦争は二度としてはならない。

（原作　矢野英雄「ベララベラ島戦記」）

※冥福…死後の幸福。